

## 新文化運動における張厚載と胡適

——舊劇改良論争を中心に——

宮尾 正樹

はじめに

鄭振鐸も『中國新文學大系・文學論争集』の「導言」で述べているように「文學改良芻議」の發表から五四運動までの間に最も活發に議論が交わされたのは演劇についてであった。特に一九一八年四月からほぼ一年間に亘って『新青年』や『晨報』で傳統的舊劇の改良に關する論争が、『新青年』同人と張厚載の間で交わされた。

張厚載は、當時北京大學の學生で、一九一九年三月の所謂「北京大學風潮」の首謀者の一人と目された人物である。事件の責任を問われて、彼は退學處分を受ける。

この事件について、周作人は『知堂回想錄』の中で、自らを「文抄公」と呼んで、當時の資料をかなり詳しく紹介している。そして次のように總括している。

張謇子(張厚載の筆名は、……いつも彼(林紆)のためにスパイとなつて北京大學の事情を報告したり林琴南(林紆)に代わつて『新申報』に原稿を送つていた。……蔡子民(蔡元培)の返事は嚴しく、しかし暖かく警告を與えたものだったが、狀況が變化し、そう黙つた

ままではいられなくなり、結局北大の評議會は彼を除籍することを決議した。北大は本來學生を除籍處分にはしない方針だったが、(特に卒業の直前には)この二つの事件は(張厚載の例とやはり除籍處分を受けた范某の例)例外だったようだ。もともと學校が退學させるのは能力があり、騒ぎを起こすのが好きな良い學生と決まっているものだが、北大もそうであった。張謇子は劇評の専門家で、北大の法科にいた時に、「險譚」や所謂「摔殼子」に關する問題で京劇の辯護に當たり、『新青年』誌上で何度も筆戰を戦わせた。<sup>③</sup>

「スパイ」のイメージは、張厚載につきまといつて離れないもののように、最近の論考でも、例えば、吉川榮一「五四時期の蔡元培」は「張厚載は林紆の教え子であり(五城學堂時代)、北京大學を攻撃した林紆に協力した、いわば内通者であった。」<sup>④</sup>としている。當時の進歩派の側から見れば當然とも言えようが、彼の經歷を辿り、書いた文章を読むともう少し違った人間像が浮かび上がってくるように思われる。本稿では、中國の傳統的舊劇に關する論争を概観し、併せて張厚載と五四新文化運動の關わりを胡適との關係を中心に考察したい。

舊劇の改良に關する論争は文學革命の内でも華々しく展開されたに

も関わらず、それを専門に論じた論文は少ない。五四運動四十周年に當たって、『戯劇研究』に數編の論文が掲載されたが、これらの論文では、舊劇改良論争を、反封建の新文化運動の一形態とし、戯劇改良に新天地を開いたと評價しながらも、『新青年』の舊劇批判については、科學的分析を缺き、西歐の近代劇を唯一のモデルとして、傳統的藝術を輕視、否定するという誤りを犯したとしている。一九五九年という時代を反映して、胡適に對する風當りはつよい。一方、舊劇擁護派については、皆封建的國粹主義者で、その代表者が張厚載であり、林紓との關係という一事だけとってみても彼の「新文化運動に對する基本的態度がわかる」とし、張厚載は結局、舊劇に對するいかなる改良も不可能だと主張したとしている。

文革後になって、一九八〇年『戯曲研究』の余從、游默「五四時期關於戯曲的論争」は論争の資料の抜粹であるが、双方の主張を公平に取り上げて紹介しており、論争の評價に新たな光を投げかけるものといえる。

張厚載の經歷は詳しくはわからないが、断片的な資料から整理すれば、次のようである。

一八九五年、上海郊外の江蘇省青浦に生まれる。少年の頃から芝居好きで、芝居を見た後は必ずその劇目を記して置いたという。又民國初年には王福壽という老優に京劇の演技も習っている。北京の五城學堂に學び、林紓の教えを受ける。一九一五年に北京大學法政科政治門に入學した。民國元年には既に『亞細亞報』や『公言報』などに劇評を掲載していたという。筆者が目にした内で最も早いものは民國二年の

日付のある「記周宅堂會戲」である。交通總長周自齋宅で開かれた堂會の様子を記したもので、當日の演目、出演者に簡單な評價を交えている。かなり早熟だったといえようが、同じ頃北京大學に入學した陶希聖は、

「北京大學の同級生の中に、劇評で非常に高い地位を占めていた張聊子という者がいた。(もしかしたら張寮子だったかも知れない。今では音だけで字を覚えていない。)」

と回想している。蔡元培が校長に就任する前の北京大學の學生の多くは、學問に興味を示さず、マージャンを打ったり俳優の後を追いかけてたりしていたということだから、張厚載は當時の典型的な北大生であったとも言えようが、いずれにせよ、北京大學の學生の中ではかなりの有名人物だったことが知れる。

一九一七年十月に『晨鐘報』に「劇評欄」が設けられると張厚載は「繆子」或は「繆公」「繆」などの筆名で頻繁に登場する。一九一九年の四月末までの二年半の間に『晨鐘報』(一九一八年九月より『晨報』に改題)の劇評欄に載った張厚載の文章は百本以上に上る。一回分が數百字程度の短いものとはいえ、週に一度は登場していることになる。(實際には一つの文章が二、三回に分載されることもあるので、登場回数ももっと多い。)張厚載は『晨報』劇評欄の主要な寄稿者の一人であった。本數において彼に匹敵する寄稿者は一人二人いるだけである。紙面から判断すれば、彼は劇評欄の編集にも関わっていたようである。劇評は、一九二六年創刊の『晨報劇刊』の余上沅や趙太卒の京劇論によって、初めて京劇を藝術の一ジャンルとして正當に評價した近代的な演劇論となったというのが定説のようであるが、それ以前は、いわば印象批評と役者のゴシップのレベルであった。少し時間は下る

が、一九二二年に書かれた劉豁公の劇評についての批評がある。それによれば「書報に戯談がなければ書報といえず、著作家にして戯談を書かない者は著作家といえないよう」な状況であった。それ故に、ろくに俳優の名前も知らないような者が、文壇で頭角を露そうとして劇評を書くということもあった。結果、大衆の好みに迎合した論調が幅を利かせていた。晶員の俳優の演じた劇は天まで持ち上げるが、そうでないものは口を極めて貶める。こうした状況は一九一〇年代でも同様であったろう。舊劇批判においても劇評は批判されている。

張厚載の劇評も大多數は上演された芝居の批評や俳優の逸話などで、特に個性的なものではない。その中で興味を引くものを一、二擧げておくと、一九一五年に「場面」（劇中の音楽）の西洋樂器使用の試みに對して、將來どうなるかは豫想できないが、當日の公演では成功している」と好意的に書いている。また、一九一九年には、南北講和會議への民衆の期待を代辯して、梅蘭芳が舞臺上で講和の早期成立を訴えて觀衆の喝采を浴びたことを紹介している。

（雁門關の）第五本の中で、梅蘭芳の扮する青蓮公主が「早く戦をやめて民の苦しみを救え」とか「他國の人から見れば南朝は南朝、北朝は北朝、でも私たちにとつてこの何年もの戦は身内同士の争いではないか」などと言つたのは政局を痛烈に批判したもので、それ故梅がこの臺詞を言つた時には觀衆は大拍手で歓迎した。……時局を批判したものでありながら、しかも演じている劇の範圍を越えていない。天衣無縫、巧まざる妙と言ふべきことに得難いものがある。

劇評家として活躍する傍ら、張厚載は上海の『神州日報』の駐北京記者として北京のニュースを寄稿していた。一九一九年三月末、誤報

記事が原因で、大學當局への同級生の請願や、教育總長傳增湘の手紙も効を奏さず、張厚載は卒業まで二月を残して退學となった。

この間の経緯を辿っておく。一九一九年二月、陳獨秀や胡適らが過激思想のため政府の干渉を受け、陳獨秀は既に天津に退いたという記事が『神州日報』に載り、更に三月四日「學海要聞欄」に「半谷通信」として、張厚載の書いた次の記事が載った。

北京大學の文科學長、陳獨秀が近く辭職するとの説がある。記者が蔡校長から取材したところ、蔡校長は陳學長の辭職説を否認しなかつた。更に大學の評議會が、文科は來學期か夏期休業後に理科と合併し教授會主任を設け學長のポストを一つ減らすことを議決したと述べた。……記者の以前の報告が確かであつたといえよう。

同日『申報』などにもほぼ同じ内容の記事が載り、たちまち反響を引き起こし、思想言論の自由を求める聲がおこつた。北京大學の内部では、『北京大學日刊』三月十日、十一日に胡適の編集部宛の手紙が、十九日には蔡元培の『神州日報』宛書簡が載り、世間に傳えられている陳、胡らに關する噂が事實無根のものであることを言明した。胡適は張厚載への手紙で記事の情報源を尋ね、外部の人間だつたらまだしも、北京大學の學生である以上、何故詳しく調査をしなかつたのかとたしなめた。張は、自分は學内に廣まっていた噂を拾つたのみだと答え、同級の陳某の名を擧げた。また、「半谷通信」は深刻なものではなく、聞いたことは全て記録するといった類のものだが、胡適に直接眞偽を確かめるべきであつたと謝罪した。ところが、胡適の質問に陳某は自分が噂を流したことを否定し、張も前言を取り消した。

張厚載は一方で、林紆の小説の原稿を『新申報』に送つていた。これはこの年の二月から「齋叟叢談」として連載されていたものであつ

た。その内「荊生」と「妖夢」は周知の如く、新文學派を中傷したものであった。林紆は「妖夢」を書いて送った後、蔡元培の「劉應欽文集」への題詞を依頼する手紙を受け取った。林紆はすぐに張厚載に連絡をとり、「妖夢」を發表しないよう頼んだ。というのは、「妖夢」には蔡元培が「元緒」の名で登場し、「羅喉羅阿修羅」に食われてしまふからであったが、張は既に上海に原稿を送った後で間に合わなかった。張厚載は蔡元培に宛て、事情の説明と謝罪の手紙を書く。それによって、北京大學を攻撃した林紆の文章を『新申報』に送ったのが張厚載ということがわかり、蔡元培は叱責の手紙を張に送った。林紆の手足となつて北京大學の事情を内通するスパイとしては、些か間拔けな話ではないだろうか。謠言の報道にしても、事實を確かめなかつた不誠實は責められても、校内に陳、胡らに對する彈壓を豫想する噂が廣まっていたことは事實だつたであらう。實際、國會に北京大學彈劾決議案が提出されているし、陳獨秀も四月には文科學長をやめさせられ、六月には逮捕されることになる。

張厚載が誤報を送つたこと、林紆の小説を掲載する手助けをしたことは事實としても、そうした行動の中にどれ程新文化運動に對する敵意、或は陰謀があつたのかは疑問である。

除籍決定後、蔡元培は彼に成績證明書を授け、天津の北洋大學に轉學するように勧めたが、結局は従わなかつた。退學後も彼は『星報』『北京晚報』などに劇評を書き、二一、二二年には鴛鴦蝴蝶派の『禮拜六』にも何編か文章を書いている。一九二七年頃、兩親を喪つた後、天津に移り、翌二八年、交通銀行に入行、二九年頃から天津の『天津商報』、『天津大公報』に劇評を書き始める。又夜間には『天津商報』、『天津大公報』の編集にも携わつた。票友として永興劇社とい

う天津で比較的大きな票房の舞臺にも度々立つた。一九三六年、上海に轉動となり、家族と共に南下する。そして、抗日戰爭の開始後單身で、香港、雲南などを轉々とした。戰爭終了後天津に戻り、一九四八年再び南下、病氣に倒れ、解放後退職した。一九四九年五月の上海解放後、唯物史觀に觸れ、それに基ついた京劇の歴史を書く。没年は不明。著書に『聽歌想影錄』（一九四一年）、『歌舞春秋』（一九五一年）、『京戲發展略史』（一九五一年）。

## 二

清末以來、小説や戯曲のジャンルにおいて、啓蒙宣傳の手段として暴露的な作品や革命のアジテーション的な作品が大量に生み出されたが、それらの戯曲の殆どは實際の上演を目的としたものではなかつた。汪笑儂が出て、時事を風刺した自編の劇を演じ、夏月潤らが市川左團次の影響を受けて、「改良劇」を演じたりしたが、これらも舊劇の體裁を踏襲したものであつた。一方留日學生の手で始められた話劇は、辛亥革命後「文明戲」として一時大流行したが、一九一八年頃には退廢して顧みられなくなつていた。洪深は「傳統的舊戲」、「改良舊戲」、「文明戲」の三者が民國六年の新文化運動時の中國の演劇の「遺産」だつたと新文化運動「前史」を概括している。そして、「文學改良芻議」に始まる文學革命—新文化運動で、演劇の改良も討論されていくことになる。

演劇界に特殊の事情として、一九一七年の崑曲の再流行が挙げられる。天樂園の韓世昌が非常な人氣を博し、以前からよく言われていた「痰迷（譚鑫培のファン）」「梅毒（梅蘭芳のファン）」と並んで「傷寒病（葉と韓をかけたもの）」が増えたと言われた。それは翌一八年になつて

も續いた。崑曲は、明代嘉靖年間に魏良輔が完成させたもので、清初まで盛んだったが乾隆年間には没落していたのが突然再び流行したのである。張厚載は一九一八年年頭に前年の演劇界を振り返って、崑曲の突然の流行を三大事件の一つとして挙げた。同年に書かれた別の文章では、「崑曲は眞の美を備えた歌舞劇である」と賞賛している。また、「崑曲の盛衰は國の興亡に繋り、太平を見んとすれば、崑曲を盛んにしなければならぬ」などと主張する者もいた。

崑曲の流行は、舊劇を愛するものにとつては「文藝復興」とも言うべき現象だったが、反對派にとつてみれば「逆流」であった。この現象を、劉半農は「古人を妄信する謬見」と斷じた。錢玄同は「隨感錄」で、京劇を八股文に、崑曲を唐宋八大家や文選に譬え、陳獨秀も同じ號の「隨感錄」に、「韓世昌」(雜誌初出時の題は「傷寒病和楊梅毒」と題して、露骨な敵意を表した文章を書いている。中國(人)の文化の未開を述べた文章だが、「北京に名高い崑曲の名角、韓世昌は竟に一字も識らない。」と韓世昌を引き合いに出している。又、胡適も「文學進化觀念與戲劇改良」で「今北京では、字も識らぬ崑曲の大家が毎日鷓鴣のように崑腔劇を唱い、無聊の名士達がこれこそ戲劇の改良だとそれをもてはやしている。……現在崑曲の復興を主張する人間と、皮黃(京劇)を崇拜する人間は皆文學進化の觀念に缺けている。」と批判している。

### 三

演劇界のこのような状況を背景として舊劇批判は行われた。一體、舊劇に對する彼らの態度は、傳統破壞論の急先鋒であった錢玄同は勿論、劉半農にしても陳獨秀にしても敵意が露骨であるように感じられ

る。ジャンルとして近接した小説や(書かれた形での)戯曲が、むしろ文言の傳統文學を打破し新しい口語(國語)文學を作り出していくための材料として重要視されたのと對照的である。それには幾つかの理由が考えられよう。小説が曲がりなりにも西洋近代のそれに近い作品を既に有していたのに對し、當時の舊劇の様式は、西洋を範と仰ぐ人々にとつては全く未開で野蠻に映ったこと。更に、既に廢れていた筈の崑曲が流行し、西洋近代劇は根付かない。そのような中國演劇の現状に對する彼らの苛立ちが爲せる業ではなかつただらうか。

一九一七年三月、『新青年』第三卷第一號の載つた陳獨秀宛書信で錢玄同が批判の口火を切つた。

今の京劇は理想もなく、限取は奇怪で、舞臺設備も幼稚で、人を感動させるものは何もなく、中國に西洋式の「眞の演劇」を生み出すためには、現在の戲館を全て封鎖しなければならぬ。續いて劉半農も、三卷三號の「我之文學改良觀」で京劇は既に硬直しており「歴史的藝術」の地位に置かれるべきだと述べた。明けて一八年四月、胡適は「建設的文學革命論」の中で、西洋の戯曲の優越を説き、三百種の西洋戯曲の名作の翻譯が緊急の課題であると主張した。(それに應えて宋春舫が、『新青年』五卷四號に「近世名戲百種目」を發表した。)

三月に發行された『新青年』四卷六號は「イブセン特集號」と銘打ち、胡適の「易卜生主義」を巻頭に、「娜拉」(「人形の家」など三本の戯曲と「易卜生傳」)を掲載した。この「イブセン特集號」は強烈な反響を巻き起こした。その影響は易新農「易卜生和中國現代文學」に詳しいが、イブセンは個性解放、反抗精神の象徴的存在となり、茅盾の一九二五年の回顧によれば「今日のマルクス・レーニンに劣らない」

影響を與えた。作劇法について言えば、胡適はイブセンを引いて、緊密で簡潔な閉鎖的構造の、舞臺上は現實と同縮尺の世界であり、人物が現實世界と同じように行動する寫實主義を主張した。その様に理解された西洋近代劇は、様式化された演技、會話の代わりの唱、恣意的に伸び縮みする舞臺上の空間と時間という舊劇の方法とは眞つ向から對立するものであった。傳統的舊劇を守る側にとっての「崑曲」の流行、改良を目指す側にとってのイブセンという、二つの大事件の影響の下に舊劇改革論争は進められていったということになる。

舊劇批判に對する張厚載の最初の反論が「新文學及中國舊劇」と題して掲載されたのは『イブセン特集號』の通信欄であつた。

執筆の日付はないが、後ろに附された胡適の回答が、三月二十七日付けになっており、又、本文中で、四卷二號の沈尹默の詩に言及していることから二月下旬から三月に書かれたものと考えられる。『イブセン特集號』が六月發行だから、張の手紙は三ヶ月も留め置かれたことになる。これは他の「通信欄」掲載の手紙の扱いと比べて異例に屬す。

この文章の前半で張厚載は、文學の變化は自然の現象で變化は免れず、文學家の改革の主張は變化を促進するだけのものだと言張する。胡適らの文學改良に賛同しながらも、性急な歐化に反對している。これは『新青年』に載つた「文學改良芻議」に對する大方の反響と同じ趣旨のものである。そして後半の舊劇批判への反論では、胡適の「歴史的文學觀念論」(『新青年』三卷三號)中の、崑曲に代わり高腔が興つたという記述の誤りを指摘し、「廢唱用白」(唱を廢して説白)台詞のみを用いるが絶対に不可能であると強調する。また、劉半農の京戲の「把子」(立ち回り)が無規律だという批判に對しては、様々な規則が

あり、俳優も長期間の嚴しい訓練を積んでいると辯護する。そして限取りには一定の譜があり、そこに褒貶の義が隠されており、錢玄同のように「奇怪」の一言で片付けるのは間違ひであるとす。結論として、中國の演劇は缺點も多いが、その本質においては眞の精神を備えて居り、改良にあたつても實際問題から着手すべきで、いたずらに理想論を振り回して、性急に舊劇を廢そうというのは誤りだと結ぶ。

「新文學及中國舊劇」の後ろには、胡適、錢玄同、劉半農の反論が附された。それらはいずれも張の主張に正面から批判を加えたものではなく、やや揚足取りの感がある。最後に陳獨秀が張の論の視野の狭さを指摘し、ヨーロッパの文學、美術、科學の結晶たる演劇に比べ中國の演劇は無價値であると締めくくっている。

張厚載の手紙は『新青年』の格好の標的にされた感があり、これを皮切りに、以後數カ月に互つて『新青年』同人と張厚載の間で論争が續くことになる。

『新青年』の同人の中には最初から、張厚載に對する態度の不一致があつた。錢玄同は、胡適が四卷六號の張厚載の通信への回答の中で、張厚載を「劇評で有名であり、通俗文學の研究者で、本誌の文學改良の主張に賛成してくれることは、誠に心強い」と紹介したことに對して不満を洩らしている。『新青年』は純粹な青年讀者のためのもので、張のような者に賛成して貰うために出しているのではないと言

い、この輩は「臉譜」を保存し、「對唱」「亂打」などの「獸の踊り」のような化物を保存しようとし、朝から晩まで「老譚」「梅郎」と言い續け、人が一言でも演劇改良を口にしようものなら、齒をむいて「唱を廢して全て説白にするのは絶対に不可能」だとか「臉譜の

區別は精密で褒貶が隠されている」だとか強辯する。これは全く、奴隸にならねば氣のすまぬ遺老が辯髪を保存しようとしたり、女性を人間と思わない外道が小脚(纏足)を保存しようとしたりするのと同じ心理だ。簡単に言えば、野蠻人の品物を保存し、進化して文明人になるのを断じて拒むような人間なのだ。

と激しく罵った。

それに對し、胡適は張厚載にもう一度舊劇を擁護する文章を書かせようと計劃した。八月二〇日付錢玄同宛書簡を見ると、錢はそれに反對し、もし載せるなら『新青年』を脱退するとまで言つたらしい。胡適はむやみに人を罵るやり方は敵を増やすだけで無益であると諫め、張に文章を書かせて討論の材料とするのは、もう一人の「王敬軒」を捏造するより價值があると説得している。錢玄同は返信で、通信欄は別として『新青年』の誌面を張の文章で「汚す」には足りないといふ依然反對し、胡適に、舊劇に對しても林紆や南社に對してと同じような態度で臨むよう望んだ。胡適は説得を諦め、自分の編集する五卷四號に張の文章を載せるべく、既に張に依頼したことを告げる。

胡適は八月中旬、既に張厚載に舊劇の長所と「廢唱用白」が不可能な理由を説明した文章を書くように求めていた。胡適は『新青年』への寄稿を期待していたのだが、張厚載は『晨鐘報』の自らの劇評欄で回答し、それに對する胡適の手紙と自分の再回答も「評劇通信」として、八月二十二日から二十六日まで同欄に連載した。

胡適は張厚載に重ねて『新青年』への寄稿を依頼した。九月に入つて、張は「我的中國舊戲觀」を書いて胡適に送る。それとは別に、險譜と立ち回りについて錢玄同を批判した手紙も『新青年』編集部宛てて送っている。また、九月二十二日から二十三日には『晨鐘報』劇

評」に「戲園的改良談」を發表して、舊劇は根本的改革を加えずとも新劇と並存できるとした上で、改革が必要なのは上演の形式であり、外國の近代的劇場をモデルに、劇場の設備、觀客の態度と共に、上演時間の短縮と幕間の休憩時間を設ける事を最も重要な課題として提案している。

「我的中國舊戲觀」の掲載された『新青年』五卷四號(一九一八年十月)は、胡適も巻頭の「文學進化觀念與戲劇改良」に書いているように、正に「戲劇改良特集號」とも言うべき内容で、胡適「文學進化觀念與戲劇改良」、傅斯年「戲劇改良各面觀」、歐陽豫倩「予之戲劇改良觀」、張厚載「我的中國舊戲觀」、傅斯年「再論戲劇改良」、宋春舫「近世名戲百種目」の諸論文と、「通信欄」に張厚載の「『險譜』——『打把子』」が掲載された。

傅斯年によれば、「戲劇改良各面觀」の原稿を渡した数日後、胡適から既に届いていた張厚載の「我的中國舊戲觀」を見せられ、同時に『晨鐘報』の「戲園的改良談」と『訟報』に載つた歐陽豫倩の「予之戲劇改良觀」を読んで、その批評として「再論戲劇改良」を書いた。傅斯年の二本の論文は、この論争において書かれた最も全面的で且つまとまった舊劇批判であり、張厚載批判である。特に「再論戲劇改良」では、張厚載の文章の概念の混亂と引用の杜撰さを厳しく指摘している。

『新青年』はこれ以後、張厚載を無視する態度をとる。五卷四號の張厚載の通信に對し、錢玄同は「私は今はもう少しまともな仕事をしようと思つているので、『顔に描かれた圖案』を研究する暇はありません。張君が今後御教示下さつても、御答えはできないでしょう。」と書いている。また、五卷五號では、劉半農が「作揖主義」に「一人の

北京の劇評家を登場させて、このような人物の言うことには拱手して「ごもつとも、ごもつとも」と言い、別れるしかないと書く。そして、同じ號に周作人の「論中國の戲劇之應廢」が掲載された後は、『新青年』は西洋の演劇論の紹介を積極的に進めていく。

二度に亘って批判の矢面に立たされた張厚載は、劇評は引き續いて書くが、戲劇改良問題についてはしばらく沈黙する。十二月になつて、ある新聞に載つた中傷記事への反論を書いた後、翌一九年の初めから再び戲劇改良について意見を發表する。その内「我對於改良戲劇的意見」では論争を振り返って、自分は胡適に舊戲の辯護をするように依頼され、文學者たちが演劇について討論するのは大いに結構な事と思ひ敵役を買つて出たのだと、論争における自らの態度を説明した。一種の釋明ととれないこともないが、論争相手が自分の意見に耳を傾けず、舊戲の全面否定を繰り返し、果ては一方的に無視してきたことに對する憤懣が現れている。更に、「均比律」で再度傅斯年の論文に反論し、「戲劇問題的各面觀」では、錢玄同を指すであろう『山膏』（山海經に現れるよく罵る蜃）のように輕佻浮薄な言葉で人を罵るだけの人間に對する嫌惡を露わにする。

三月、張厚載は北京大學を除籍になる。論争は『新青年』の側から既に一方的に終結を宣言されていたようなものであったが、張厚載にとつてもこれで終わりを告げる。

#### 四

論争の経過の中でも觸れたように、張厚載は、錢玄同は別として、胡適や傅斯年を必ずしも敵視していたわけではなく、むしろ近い位置にいたと考へていた。恐らく胡適の側からも同様であつたと思われ

る。張厚載と胡適の關係を見ておきたい。

論争が始まる前に面識があつたかどうかは不明であるが、張厚載の方は勿論、陶希聖の回憶にもあつたように、劇評で有名な學生として、胡適も張厚載を、少なくとも名前位は知つていたであらう。張厚載は胡適の文學改良論への賛同を再三表明しているが、それはカムフラージュであつたとは思われない。

一九一八年の三月末から四月の半ばまで張厚載は『北京大學日刊』に「希聲室雜記」と題する筆記を連載した。中國語と西歐語の言語の「進化」、共通性や命名、比喩の類似、外國の雜誌の記事の紹介など、内容としては輕薄なものだが、古文について次のように書いている。

「古」の字は死亡と同義で、人が死ぬ事を「作古」などと言うが、英語でも古文の事を死文(Dead Language)と言う。……現代の文字でないものは全て古文と言うことができる。古文は既に死んだ者の死んだ文字なのに、我々現代に生きるものが何故汲々として眞似ねばならぬのか。我々は獨立自尊、現代の文、生氣のある文を作らねばならぬ……これが文學に變遷のある理由であり、文學家に文學革命の論のある所以である。

これは「建設的文學革命論」の次の一節に明らかに似ている。

中國には二千年間、なぜ價値のある、生命のある「文言の文學」が生まれなかつたか、それは二千年の間に文人の作つた文學は皆死んだものになり、皆既に死んだ言語、文字を使つたからだ。死んだ文字は活きた文學を生み出す事は出来なし。

だが、また、この二篇の文章から、舊劇論争に見られた兩者の傳統に向かう態度の相違と同質の相違を見いだすことも容易である。すな

わち、張厚載は現在の古文使用に反対しているのみであり、古文はいわば、現代において死んでいるのに對し、胡適においては古文は昔から死に續けているのである。それは、封建的傳統的な文化を打倒しないでは新しい文化は生み出されないとする立場からすれば、根本的な相違であろう。しかし、胡適は（そして張厚載も）それを絶對的な矛盾とは考えなかった。張厚載の古文に對する考え方は少なくとも、『新青年』に寄せられた文學革命に對する反應の多くと變わるものではなかった。

張厚載に寄稿を依頼することに關しての錢玄同宛書簡で、胡適は「張厚載は新聞に文章を書いて得意になっていただけで、自分は彼を救ってやりたいのだ」と書いている。再三張に文章を依頼したのも、批判の材料にしようという計算はあったにしても、張を自分たちに近い位置にいと認めていたからであろう。張厚載にも『新青年』に寄稿するに當たっては、胡適への信頼感があつたであろう。

論争に向かう態度という觀點から見ても、張厚載と胡適の間には類似點が見られる。一九一七年四月の陳獨秀宛手紙で、胡適は文學革命を進める姿勢を次のように説明している。

このこと（文學革命）の是非は一朝一夕に定まるものではありませんし、一人二人が決められるものでもありません。國內の人士が我々と力を合せて、冷靜にこの問題を研究することを願つて止みません。討論が煮詰まれば是非は自ずから明らかになるでしょう。我々は既に革命の旗を掲げており決して後退はしないけれど、自分たちの主張のみが正しくて他人の意見に耳を傾けないという態度を採ることはできません。

胡適の方法指向はグリーナーも志摘しているが、胡適にとっての文

學革命の意義は、新しい文學の創造と同等に、或はそれ以上の重みで論争という近代的方法を確立することであつた。既に見たように張厚載はそうした胡適の意向に答えているように思われる。

だが、舊劇に對する考え方は兩者に大きな隔りがある。この論争を最も積極的に起こそうとしたのは胡適だが、なぜ舊劇改良に拘わつたのか、胡適の舊劇觀を見てみよう。

『胡適的日記』によれば、胡適は米國留學前の一九一〇年に、上海で頻繁に觀劇に出かけている。その感想を記している日もあり、例えば、一九一〇年二月十六日には、

夜、春貴部で觀劇。貴俊卿の『空城計』最も佳。その「城樓」の一節は飄灑風流、昔、劉鴻昇のこの劇を唱うを觀て、飄飄として仙ならんと欲すと嘆じたものだが、今、貴俊卿の美しさは劉を凌駕するものである。ただ聲が稍か低い。

と劇評ばりの記述がある。『四十自述』にも、この「放蕩」の時期についての回想があるが、友人と俳優を呼んで芝居を習つたりしたとい

渡米後西洋の近代演劇に觸れて、胡適の舊劇に對する考えは變化を見せる。一九一二年九月には、『ハムレット』を觀ての感想をかなり長い紙幅を費やして記している。實際の上演では原作の半分近くが削られていることを指摘して、

シェイクスピアがこの劇を書いたのは遠く十七世紀の初めで、舞臺には背景がまだなかつた。吾國舊劇では背景としては、牌をかけた關門とし、帳を設けて床とする位のものであるから幕景が増えてかまわないが、現在の劇場は違ふ。背景は皆、眞に迫つていなければならぬので、裝置を作るのも大仕事で、何度も取り換えるわけ

にはいかない。それで、景を削ったり合わせたりして最小限にするのである。

と記し、「古今の事情の違いや、戯劇の進化の様子がよくわかる」と書いている。

胡適は留學中に何度か觀劇にでかけ、また、シェークスピアは勿論、ハウプトマンやイプセンまで近代の戯曲を廣く讀んでおり、その中から、西洋近代戯劇をモデルとした演劇改良論を形成していったものと思われる。

しかし留學時期、胡適は中國の舊劇を全く無價値なものと考え、うになつたわけではないようだ。「ハムレット」の感想には張厚載の劇場改良の主張に通じるものが感じられる。友人と手紙で文學改良に關する論議を戦わせた際も、中國で聽いた舊劇の唱の美しさに觸れている。唱を中心とした劇は世界文學の趨勢からして廢れていくだろうと豫想しながらも、口語文學、特に口語詩形成の一つの源泉として、京調の十字句の自由さを取り入れることが出来ないだろうかと思つていたようだ。

一九一七年七月、歸國して數日後、胡適は大舞臺に觀劇に行く。ここでは趙如泉らの「改良劇」が演じられていた。大舞臺は新式の西洋風劇場で、舞臺の背景や小道具も新式であつた。しかし、舞臺で演じていたのは、少年胡適が上海に出てきたばかりの頃、既にベテラン俳優であつた「骨董品」たちであり、新しいセットの前で、相變わらず類型的な演技をしていた。舞臺がはねた後、彼は友人に言つた。

「この大舞臺は中國の絶妙なミニチュア模型だ。」

この事件が胡適を一轉して舊劇否定に向かわせたとするのは單純な見方であるが、それでもこの挿話は象徴的である。胡適は舊劇を演

劇の枠の中でのみ論ずることはできなかつた。敢えて舊劇の全否定を選択したのである。

### むすび

一九一九年五月『新中國』雜誌が創刊される。主編は陶孟和だが、胡適も發刊の準備に深く關わつていたらしい。『五四時期期刊介紹』はこの雜誌を「思想的立場から言えば明らかにブルジョア改良主義の傾向」であると性格づけ、多くの新文學を提唱する文章を載せたが、「新文學の局面を白話文學に局限し、文學の古い思想との妥協を主張した」と紹介している。この雜誌には張厚載も寄稿しており、創刊號に「所謂過激派者」と「人力車問題」の二本が掲載されている。前者は米國の雜誌の論文の翻譯であり、前年の初めあたりから、新聞雜誌で盛んに取り上げられるようになっていた過激派（主義）に關する記事と同じ論調である。「人力車問題」は政府の人力車夫救済を主張したもので、やはりこの時期各雜誌を賑わしていた社會問題を扱つたものであり、過激主義の進入を防ぐために社會の改良が緊急の課題であるとする立場であつた。張厚載は『新潮』にも寄稿しており、これらの文章は一九一九年の四月から五月にかけて發表されている。「人力車夫」は北京大學退學後書かれたものであり、退學の前後、胡適や傅斯年らとの交際があつたことが窺われるのである。この事實は意外な感じを與える。誤報事件以前の執筆の約束をお互いに履行しただけなのかも知れないが、少なくとも完全な絶縁状態には至つていなかったことは想像できる。

従來、「國故黨」と評價されてきた張厚載であるが、實際は新文化運動、特に胡適とは意外に近い立場にあつたというのが本稿の結論で

ある。彼は新思潮渦巻く北京大學と、趣味的な劇評界と二つの世界に身を置いていた。彼自身にとってみれば兩者は折り合いのつくもので、新文化運動に賛同すること、舊劇の世界に没頭することは矛盾しなかった。そのことから彼にとっての新文化の不徹底さや落後性を云々することもできようが、張厚載という人間がそうであったとしか言い様がない氣もする。或は文學革命ののろしが上がった後、『新青年』に寄せられた賛同の通信が大方微温的なもので、陳獨秀らを苛立たせたことを考え合わせれば、張厚載は當時の青年の一つの典型ともいえるだろう。直接には張厚載という一小人物の問題にすぎないともいえるが、やはりそれだけでなく、文學革命における「進歩」と「反動」の對立と簡單にいわれていたことについても、その實際のあり方、位相については、もう少しきめ細かい見直しが必要であることを示唆しているように思われる。

注(1) 事件の経過は、例えば、周天度『蔡元培傳』p. 151~160。(一九八四年九月、人民出版社、北京)を参照。

- (2) 例えば、陳獨秀「關於北京大學的謠言」(『獨秀文存』卷一)。
- (3) 『知堂回想錄』p. 353~354。(一九八〇年十一月、三育圖書、香港)。
- (4) 『東大文哲文學會報』第九號、一九八四年六月。
- (5) 『戲劇研究』一九五九年二期(六月)、中國戲劇出版社、北京。收錄論文は次の三篇。  
田漢「接受『五四』時期的精神和經驗創造社會主義新戲劇」  
任桂林「『五四』運動和戲曲革新」  
溫凌「『五四』時期關於戲曲的論爭」。
- (6) 『戲曲研究』一九八〇年一期、吉林人民出版社。
- (7) 経歴に就いては特に注記しない限り、次の文献による。

- 張謇公『聽歌影想錄』(一九四一年十月、天津書局、天津)
- 張謇子『歌舞春秋』(一九五一年)
- 同『京戲發展略史』(一九五一年十月、上海大公報、上海)。
- (8) 『聽歌影想錄』所收。
- (9) 『北京大學豫科』(『傳記文學』三卷四期、一九六三年十月、傳記文學出版社、台北)。
- (10) 『我的評戲觀』(『戲雜誌』第一號、一九二三年五月、戲社、上海)。
- (11) 錢玄同「今之所謂『評戲家』」(『新青年』五卷二期、一九一八年八月) 傅斯年「戲劇改良各面觀」(『新青年』五卷四期、一九一八年十月) 歐陽予倩「予之戲劇改良觀」(『新青年』五卷四期) など。
- (12) 『曹潤田氏宅中大堂會』(『聽歌影想錄』p. 56)。
- (13) 『梅蘭芳改良雁門關』(『歌舞春秋』p. 36~37)。
- (14) 『北京大學日刊』一九一九年三月十九日の「蔡校長致神州日報記者函」に附されている。
- (15) 薛綏之、張俊才編『林紓研究資料』p. 24。(一九八三年六月、福建人民出版社)。
- (16) 姚惜雲「天津的票房」(『天津文史資料選輯』二十一期、一九八二年十月、天津人民出版社、天津)。
- (17) 『現代戲劇導論』(『新文學大系戲劇卷』)。
- (18) 張謇子「崑曲之發展」(一九一八年、『聽歌影想錄』所收)。
- (19) 周胎白「中國戲曲發展史綱要」p. 43~48。(一九七九年十月、上海古籍出版社)を参照。
- (20) 『民六戲界之回顧』(一九一八年、『聽歌影想錄』所收)。
- (21) (18)に同じ。
- (22) 天嚮子「崑曲一夕談」(『春柳』一卷一二期、一九一八年)。
- (23) 『我的文學改良觀』(『新青年』三卷三期、一九一七年五月)。

- (24) 『每週評論』一八號、一九一八年五月。
- (25) 『新青年』五卷四期、一九一八年十月。
- (26) 朱維之等『比較文學論集』(一九八四年一月、南開大學出版社、天津) 所收。
- (27) 『譚譚《玩偶之家》』(『文學週報』第百七十六期)。
- (28) 興味深いのは、文言一致の例として張が擧げている名詞が、「結果」、「改良」、「必要」、「事實」といった所謂新名詞で、新聞雜誌の記事に登場し、當時既に社會に(一定程度)普及していた言葉であることで、胡適のイメージに描いた白話とは、ずれを見させていることである。
- (29) 八月八日付劉半農宛書信。『新青年』五卷二期掲載。
- (30) 『胡適來往書信選』(一九八三年十一月、中華書局香港分局、香港)。本書ではこの三通の手紙を一九一八年二月に書かれたと推定しているが、錢玄同の手紙から『新青年』五卷二號が出来上がったばかりであることが知れるので、八月でなければならぬ。恐らく編者は、手紙が張厚載の文章を載せるかどうかを議論していることと、張厚載の「新文學及中國舊戲」の執筆時期を考え併せて、二月と推定したものとと思われるが、誤りであろう。また、『中國現代文學資料叢刊』五卷(一九八〇年四月)にも、同じ胡適の錢玄同宛ての手紙二通が掲載されているが、こちらは一九一九年二月と推定している。何を根據にしたのかは不明である。本稿では上述の理由により、一應一九一八年八月に書かれたと推定して論を進めている。
- (31) 「再論戲劇改良」。
- (32) 張厚載通信への回答。
- (33) 『晨报』「劇評」一月六日、八日。
- (34) 同右、二月九日、十日。
- (35) 同右、二月十六日、十八日。
- (36) 『北京大學日刊』一九一八年四月九日。

新文化運動における張厚載と胡適

- (37) 『新青年』四卷四期(一九一八年四月)。
- (38) (30)と同。
- (39) 『新青年』三卷三期(一九一七年五月)。
- (40) Jerome B. Grieder "Hu Shih and the Chinese Renaissance" pp. 48- (Harvard U.P., 1970)。
- (41) 『胡適的日記』p. 11. (一九八五年九月、中華書局香港分局、香港)。
- (42) 『四十自述』(一九三三年九月、亞東圖書館、上海)。
- (43) 『藏暉室劄記』卷二 pp. 87~96. (『胡適留學日記』一、一九四七年十一月商務印書館、台北)。
- (44) 同右、卷十四、pp. 990~994。
- (45) 『歸國雜記』(『新青年』四卷一期、一九一八年二月)。
- (46) 『胡適來往書簡』pp. 29, 35, 40。
- (47) 『五四時期期刊介紹』三、p. 362。